

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

造語要素「不・無・非・未」の機能  
一日中、日韓との対照研究を視野に入れて一

氏 名

朴 景淑

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では否定の造語要素「不・無・非・未」の造語機能と意味機能について考察を行い、日本語と中国語、日本語と韓国語の「不・無・非・未」の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

従来の研究では、否定の造語要素を対象に語構成論、意味論、認知言語学それぞれにおいて、研究がなされている。各否定の造語要素について語構造と意味特徴が検討されているが、例外や不十分な点も存在する。「不・無・非・未」の否定の意味と下接語の品詞性、結合語の品詞性についてはより厳密かつ詳細に検討する必要がある。そこで、本論文では、先行研究の成果を踏まえ、語構成論、意味論、及び認知言語学の理論を総合的に用い、「不・無・非・未」の造語機能と意味機能について考察を行う。「不・無・非・未」の下接語の品詞性に規則性があるものの、その規則性に沿うすべての語に「不・無・非・未」が前接できるわけではない。「不・無・非・未」の造語力は漢語の消長と深く関わっており、共時的のみならず、通時的な考察も必要となる。よって、本論文では通時的に各造語要素の3字結合語の使用実態にも注目したい。さらに、日本語と中国語、日本語と韓国語との対照研究も視野に入れ、日中、日韓の「不・無・非・未」の類似点と相違点を明らかにする。

本研究を通して、日本語学習者の否定の造語要素を勉強する際の母語による干渉を軽減し、日本語教育者が造語要素を教授する際の参考資料として活用することが可能となる。

本論文は2部十章からなる。以下に各章の要点をまとめる。

第一章は本論文の序論をなすものである。第一章では、先行研究に基づき、日中韓三言語における「不・無・非・未」の位置づけと問題意識、研究目的、研究対象、本論文の構成内容、及び研究意義について述べる。

第二章から第七章は本論の第I部であり、日本語の「不・無・非・未」の造語機能と意味機能について考察する。

第二章では、「不」と「非」の２字結合語と３字結合語を意味により分類し、通時的に「不」と「非」の３字結合語の意味機能と造語機能について考察行う。

「不」は「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」、「(量、レベルなど)が足りない」、「～が悪い」、「～でない」、「～がない」、「(動作)しない」、「(状態)しない／していない」といった７つの意味を持っている。「非」は「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」、「(量、レベルなど)が足りない」「～が悪い」「～でない」という４つの意味を持っている。「不」は「～がない」の意味以外に２字結合語、３字結合語ともに、各意味による造語が見られるが、「非」の２字結合語の持つ「足りない」「悪い」の意味は、「非」の３字結合語の造語には影響を与えていない。

造語機能から見たとき、「不」の３字結合語は、既に近世以前から使用されているのに対し、「非」の３字結合語は中古の「非参議」、中世の「非学生」という二つの語例のみであり、「非」の否定の意味は「～でない」という範囲外を表す。明治、大正期において「不」と「非」の３字結合語は急増するが、臨時的一語も多かったため、多くの語は現代に定着されなかった。

第三章では、「無」の３字結合語について下接語と結合語の品詞性、下接語の意味と品詞転換機能との関連性について分析を行い、「無」の造語機能について通時的な考察を行う。

「無」の下接語は名詞、動名詞、形容動詞性名詞が見られ、「無」の名詞下接語と動名詞下接語は、「無」と結合した後に形容動詞性名詞に転換する語と形容動詞性名詞に品詞転換しない語とが見られる。これは、「無」の結合語に「無」に近づく幅があるか否かと関わりがある。

通時的に見た場合、中世以前はもっぱら「無」の２字結合語が使用される。「無」の３字結合語の使用例は中世から見られるようになり、特に明治、大正期では急増する。現代語における「無」の３字結合語の半数以上が明治、大正期から使用されているものである。

第四章では、「未」の造語機能と意味機能について考察を行う。「未」の否定によって表す段階は動作過程の開始限界に達していない状態または動作過程の終了限界と結果状態に達していない状態を表す。前者は「動作がまだ発生していない状態」を表し、後者は「動作がまだ完全に終了していない状態または動作が結果状態に達していない状態」という「動作状態の否定」を表す。近世以前において、「未」の２字結合語は見られるが、３字結合語は見られず、主に動詞の否定として使われている。明治から現代に至るまで「未」の３字結合語の語数が減少している。

第五章では、朝日新聞の１９８５年１月１日から２００９年１２月３１日までの「不・無・非・未」が程度副詞の「とても」と「すこし」に後接する用例を考察する。

最も程度副詞に付きやすいのが「不」の結合語であり、「とても」と「すこし」に後

接する例がともに多いことが明らかとなった。それは、「不」の結合語は形容動詞になりやすく、程度性を表しやすいからだと考えられる。また、「不」の結合語は極限を想定されにくいため、肯定側との距離により、「とても」と「すこし」が偏りなく前接される。

「無」の結合語は、少量を表す「すこし」より、大量を表す「とても」に付きやすい。「無」の結合語は本来には、「一点的」の状態性の語であるため、程度副詞に付かない。しかし、「無」の一部の結合語は、「無」の「ゼロ」の意味が弱化したため、「一点的」ではなく、「極限」を想定しうる語になる。程度性を持つ「無」の結合語は、否定側の「ゼロ」という極限に極めて近く、肯定側までの距離が遠いため、大量を表す程度副詞に付きやすい。

「非」の 3 字結合語には、一点的で程度性を持たない語が多い。程度性のある「非」の結合語は、「ある範囲から外れる」という意味を持っているので、肯定側までの距離が遠いため、「とても」に付きやすい。

「未」の結合語の前に程度副詞が付く用例は最も少ない。「動作過程の終了限界または結果状態に達していない状態」を表す「未」の結合語の一部は極限を想定しうる点で「無」に類似している。ただし、「未」の結合語の場合、否定側の極限に近いとは限らないので、「とても」と「すこし」にあまり偏りなく付くことができることを示している。

第六章では、「非〇〇的」の成立過程について考察を行う。「非」は「不」「無」「未」に比べて、接尾辞「的」との二次結合が多いのが特徴である。「非〇〇的」の定着過程には「〇〇的」の定着過程を経て、「非」が加わるプロセスが見られる。「不」と「非」は「不衛生／非衛生的」「不合理／非合理的」「不経済／非経済的」など後続の語に同形の 2 字漢語が見られるが、形態上「非」は「的」を媒介として連体修飾をし、「不」は「不〇〇な」の形で連体修飾をする。「ある範囲から外れる」という「非」の意味機能は「不」と異なると論じている。

第七章では、「不・無・非・未」の下接語と結合語の品詞性、結合語の接続形態及び否定の意味の相互作用により、「不・無・非・未」の優先選択の規則性をまとめる。下接語が N の場合、最も前接しやすいのは「無」であり、「非」・「不」がそれに次ぎ、最も前接しづらいのが「未」である。「マイナスの評価」の価値判断を表す必要がある場合は「不」が使用される。下接語が VN の場合、「不・無・非・未」の 4 種の造語要素はいずれも前接することができるが、「無」は VN の語を否定する場合、主に下接語の名詞性を否定する。これを意味用法の側面からみると、「その動作がまだ発生していない」、あるいは「完了していない」という動的过程における一時点の状態を表すときは「未」が優先的に選択される。それに対し、動的过程と関わりのない静態状態の否定には「不」と「無」が使用される。下接語が AN のときは「不」が圧倒

的に優勢である。「非」の 3 字結合語のうち、下接語が AN の語例が少なく、「無（む）」と「未」は下接語が AN の語に前接することができない。ただし、「非」は「的」と共起し、形容動詞の語幹を形成することを示している。

第八章と第九章は本論の第Ⅱ部である。

第八章では、日本語と中国語の「不・無・非・未」の同形結合語が、中国語へ直訳可能かどうかを中心に分析し、日中両言語の「不・無・非・未」の類似点と相違点を観察する。日中同形結合語が中国語において直訳できないのは日中「不・無・非・未」の下接語の品詞に制約があるのが一因である。日本語の「不」は数多くの名詞の前に付けられるが、中国語の「不」は基本的に動詞と形容詞の前に付き、名詞には付きにくい。また、日本語の「不 A」の下接語は、価値的肯定性を持っているのに対し、中国語の「不 A」の形容詞下接語は価値的肯定性を表す語とは限らない

3 字結合語の文中における成分からみたとき、日本語の「無」と「未」の 3 字結合語は、一語化され、文中で主語、述語、目的語、連体修飾成分及び連用修飾成分など多様な文法成分を担うことができる。一方で、中国語の「無」と「未」の結合語は連体修飾成分または連用修飾成分になりうるが、主語や目的語にはなりにくい。また、述語になる場合は、「無」と「未」は語彙的否定ではなく、文法的否定を担う。よって、日本語から中国語へ翻訳するとき、連体修飾成分と連用修飾成分における「無」と「未」の結合語は、中国語へ直訳可能であるが、主語、目的語、述語成分における中国語訳は、ほかの成分の追加が必要となる。

日本語の「非」の 3 字結合語の下接語には、N、VN、AN の語が見られる。AN は 1 語のみであるが、「非」は「～的」を否定する語例が数多くある。中国語の「非」の 3 字結合語は独立性が低く、主に名詞複合語を否定する。日本語の「非」の 3 字結合語は中国語で直訳できず、中国語では「非＋複合語」の形で翻訳すると分析している。

第九章では、日韓両言語の類似点である品詞転換機能に着目し、「不・無・非・未」の下接語と結合語の品詞性について対照研究を行う。日本語の「不・無・非・未」の下接語が N または VN の場合、結合語は AN に変える品詞転換機能が見られる。ただし、下接語が VN の場合、その結合語は動詞性を失う。一方で、韓国語の「不・無・非・未」の下接語が VN の場合は、多くの語が動詞性の形態を保有している点で日本語と異なる。それは、日本語においては否定要素を述語の前に置くことができないのに対し、韓国語の固有語では否定要素を述語の前に置く形態があるためであると考えられる。また、韓国語の「不・無・非・未」の結合語が状態性のみならず、動詞性も表せることも示した。韓国語の下接語が VN のとき、全ての結合語が VN になるわけではない。結合語が VN になる度合いは、韓国語の「不・無・非・未」の結合語が動詞性を表しやすいか否かに関わりがあると考えられる。

第十章では、本論文の主な結論をまとめ、今後の課題を提示する。